

2024年3月24日

説教題「希望—イエスは生きておられる」第二コリント5章15節

主任牧師 加藤 誠

「その一人の方はすべての人のために死んでくださった。その目的は、生きている人たちが、もはや自分自身のために生きるのではなく、自分たちのために死んで復活してくださった方のために生きることなのです。」
(第二コリント5章15節)

十字架で殺された主イエスが墓の中から起こされ、暗闇覆う世界に復活の希望の光が射し込んだ日。主イエスの弟子たちが自分自身のために生きるのではなく、神と隣り人のために生きる歩みに向けて新しい一步を踏み出した日。それがイースターです。

ヨハネ 11 章に、この復活の命を巡って交わされた主イエスとマルタの会話が紹介されています。マルタの兄弟ラザロはその四日前に病気で亡くなり、イエスがマルタたちのところに到着した時には、すでに墓に収められた後でした。マルタは言いました。「主よ、もしここに居てくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」。「せっかく来てくださったのに、残念ながら手遅れでした」という思いがそこにはこめられていたのだと思います。私たちは知っています。生きているうちなら何か方法があるけれど、死んでしまったならすべては手遅れであると。死は、すべての終わりである。人間のいかなる努力も、死の現実を動かすことはできない、と。

わたしは三カ月前に 91 歳の父を送りました。冷たくなった父を前にいろいろな思いがあふれるのを覚えました。父への感謝の思いや、約一か月間肺炎を患う中で最後までよく頑張ったねという労いの思い。その一方で「年老いた父に対して、もっとこうできたのではないか」という申し訳なさの入り混じった思い。また「父が生きていてくれること」で自分の中にあつた張り合いのようなものを失い、心の中にぽっかりと穴が開いてしまった喪失感…など。その経験を振り返るとき、この時のマルタも、弟の死による大きな喪失感、男手を失った一家のこれからの歩みへの不安、その一方で、病気が深刻になる前にどうして自分は弟の体調の変化に気づいて医者に見てもらおうように強く勧めなかつたのか…という後悔など、一人で抱えるには重すぎるいろいろな思いがあふれて、その場から動けなくなっていたのではないかと想像します。

そのマルタに主イエスははっきりと言われました。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じるか」と。「死はすべての終わりではない。神は、死者をも起こし、生かす。後悔と悲しみと不安に沈んでいるあなたをも起こし、生かす。愛の神は、ラザロも、あなたも、死の中から起こし、命の希望に生かされる方だ。あなたは、神の復活の命に生きる者とされなさい」と迫られたのです。マルタは「終わりの日に、すべての者が復活させられること」を知識として知っていました。しかし主イエスはマルタに「信仰」を求めたのです。なぜなら復活の命の光は、私たちが頭で知るだけで

なく、私たちが信じる時に、私たちの中で輝き始めるからです。

この後、主イエスは「ラザロよ、出てきなさい」と墓の前で大声で叫ばれて、彼を墓の中から呼び出されますが、この言葉はマルタにも向けられた言葉ではないかと思うのです。「マルタよ、出てきなさい。悲しみが支配する暗闇から出て、神の復活の命の光の下で、神の愛を受けてとり、生きていきなさい」と。

イエス・キリストの十字架は、この世界がどれほど絶望的な暗闇の中にあるかを示す出来事でした。あれだけ誠実に神の御旨を生き、病や悩みの中にある一人ひとりのために力を尽くされたイエスに憎悪と殺意を向けて抹殺する。そのような人々こそが十字架で裁かれるべきなのに、彼らは生き残って、その反対に「神の子」が不条理な苦しみを受けて死んでいく。「この世の中はおかしい！狂っている！」。今日も世界を覆う絶望的な暗闇を映し出している出来事。それが十字架です。

しかし、神は私たちの思いをはるかに超えた不思議な方です。その絶望的な十字架が、新しい命、希望の始まりとなりました。主イエスは暗い部屋の中に閉じこもっていた弟子たちの真ん中に立たれて「聖霊を受けよ」と彼らに命の息吹を吹き込み、この世界の中で隣り人を愛する使命に弟子たちを派遣します。暗闇が覆う世界の中でうずくまり動けなくなっていた弟子たちは、十字架の主が吹き込まれる神の愛を受け取り、自分の隣り人を自分のように愛する新しい使命を生きる者とされていったのです。「わたしは復活であり、命である。ラザロよ、墓の中から出てきなさい」。十字架の暗闇を貫いて確かに届けられている復活の主の命が、弟子たちを墓の中から導き出し、新しい歩みに生かしていったのでした。

我が家の居間にカトリックの晴佐久昌英神父の日めくりが置かれていますが、その中の「深い森の奥で光る 一枚の葉っぱになる」という言葉を見つけて、わたしの心に、天からの一筋の光が射し込むのを感じました。深い森の奥の葉っぱがどうやって光ることができるのでしょうか。葉っぱそのものは光ることができません。しかし、天から射し込む光を受けるとき、深い森の奥の葉っぱは光るものとされるのです。深い森の奥に光を届けてくださった方。それは十字架の主イエスです。この方は私たちの世界の深い暗闇の一番深いところまで降って下さり、神はその十字架の主を、復活の希望の光で照らし出してくださいました。神が暗闇の中に注がれる希望の光を信仰で受けていく時、私たちは深い森の奥で光る一枚の葉っぱとされるのです。

「ラザロよ、墓の中から出てきなさい」という主イエスの呼びかけは、今日ここに集っている私たちにも語りかけられています。この世界の暗闇に呑み込まれてしまうのではなく、深い森の奥に天から射し込んだ復活の希望の光を受け取り、それぞれが神の光に向かって歩みだす希望の一步を始めていきたいのです。